文化の仲間

京浜協同劇団と共に歩む文化の仲間　会報 No.75　2016 年 8 月 7 日発行
川崎市幸区古市場 2-109　京浜協同劇団内　TEL 044-511-4951　郵便振替 00250-3-18369

第 37 回かわさき演劇まつり

4 つの劇団と市民参加で「ブンナよ、木からおりてこい」

37 回目を迎えたかわさき演劇まつりが、7 月 23 日、24 日に、4 つの劇団と市民参加によって多摩市民館で開催されました。演目は「ブンナよ、木からおりてこい」。出演者や観た方々に、感想を寄せていただきました。

すずめを演じて

廣田　健

世の中と演劇するオフィスプロジェクトM劇団員、廣田健と申します。今回の第 37 回かわさき演劇まつり「ブンナよ、木からおりてこい」（以下「ブンナ」と記す）にて、すずめ 1 役として出演させていただきました。

「ブンナ」では、1 つ 1 つの生命が、1 つ 1 つの生涯を持っている、強いものも弱いものも、例外は無く、自分の生命を生かされている、ということが描かれています。どんな生き物も、自分の大きさを知り、世界と自分というものを知ることで、この世界で自分に何ができるかを考え、生きていかなくてはならない、というお話です。

これだけ聞くと、児童演劇にしては子どもには少し難しいように感じられます。むしろ大人でさえ、答えが見つけられていないようなことでもあります。

しかしながら、『テアトロ』1979 年 8 月号にて、原作者の水上勉さんは児童演劇についてこう述べています。

「しかし、むずかしいことはないのだった。子をなめ

ちゃいけない。子供にぶら下っちゃいけない。子供はひっぱられることを喜ぶのだ。」

「こんな子供に、そうでしょうね、こうでしょね、と甘えてつくられる芝居なんぞ糞くらえである。」

また今回演出の小山裕嗣さんも、観客にすべてのことが分かる必要は無く、それよりも観客 1 人 1 人が、どういうことだろう、と考えてくれることが重要、とおっしゃっていました。

写真©山村厳　以下同

生演奏のバンドメンバー

カエルのブンナ

とんぼをつかまえようと……

私も今回すずめ役を演じさせていただくに当たり、可愛いらしいすずめというよりは、ちゃんと「生きている」ということを意識して演じさせていただきました。

当たり前ですが、すずめは小さな鳥です。ですから、みんなで集まって生活しています。そうすることで敵に狙われても、1匹がそれに気付けば、皆逃げることができます。

1匹が餌を見つければ、その1匹が鳴いて仲間を呼び寄せ、皆で餌を食べます。そうすることでコンスタントに餌が食べられ、餓死する可能性を減らしているのです。中には餌を見つけても仲間に知らせず、独り占めにするすずめもいるそうですが、そういう図太いすずめは、群れで除け者にされ、他の者が餌を見つけたときには分けてもらえないそうです。

すずめは弱い鳥です。種類にもよりますが、心臓は1～4gぐらいしかありません。それほど長く飛んでいることもできません。ですから、我欲を抑えて、仲間と協調して生活するのは、自分の生命を守るためなのです。仲間意識や連帯感もあるでしょう。しかしそれだけではありません。「助け合い」という言葉を使えば口当たりが良い印象を受けますが、生きていくには、群れて生活するしかないのです。

その弱いすずめが、追いつめられて、1番先に我欲に走る姿に、個人とコミュニティとの間の強いメタファーを感じ、それを念頭に入れて演じました。いかがだったでしょうか。

すずめが椎の木の上で

今回は演劇まつりに参加させていただき、ありがとうございました。共演者やスタッフの方々もありがとうございます。そして演劇まつりを支えてくださっている地元の方々にも厚く御礼申し上げます。これからも演劇まつりという場所が末永く続くことをお祈りいたします。

命の大切さ・自然のきびしさ

宮田　真鈴

私は、この話を見て、生き物がいつも食べ物をねらっている、そして命をねらわれていることを知り、自然のきびしさを改めて感じました。

すずめと百舌鳥がとびに連れられて

また、虫に命はないといったすずめさんや、残酷な殺し方をするとびさんに、食べ物には命があって、それをいただいてあなたが生きのびていることに感謝しなさいと教えてあげたいです。

家でカエルとメダカと金魚を飼っていますが、命はみなあるので大事に育てていきたいです。

（小学5年生・出演者村田アミさんの孫）

蛇もとびに連れられてきたが…

そのエネルギーに包み込まれ

宮川　淳子

今年も演劇まつりの季節が巡ってきて、多摩市民館もなじんできた感のある７月の日曜日に「ブンナよ、木からおりてこい」を観た。

「またブンナ演(や)るの？」演劇まつりで演ると聞いて私は思わずそう思った。劇団の研究生の担当時に卒業公演として演り、まつりで１回、計３回目だったから。「確かにブンナは名作だけど他の作品が観たいな」

ネズミは死んでしまった

しかし観終わってみると、案外全体を観られたのは今回が初めてだったなという気がした。最後には思わず涙がジンワリと湧きあがってきた自分に少しとまどった。

ネズミの死体から小さな虫が湧いてきて、やがて「ガ」になり、それを食べてブンナは生き延びる場面、今までは「ガ」をシャボン玉や小道具で表していることが多かったが、今回は楽喜楽(らきら)きっずの子どもたち、小さな透明な羽を背にたずさえて、舞い踊る、倒れているネズミにスッとよりそう、小さな子どもたちなのに、まるで大いなる者に、許されたような安堵感を覚えた。

なにせ木の上のてっぺんでは、すずめに百舌鳥(もず)、蛇にネズミと、もうすぐ殺されてしまう者の苦しみ、恐怖が、これでもかと語られるのだ。頭では死を受け入れたつもりでもその瞬間には「死にたくない、助けてくれ」と叫び、なんだか自分自身も身につまされる。だんだん自分も年をとってくると、動物たちのセリフも身にせまって感じる。人間ならグッとこらえていることもできるかもしれないが、そこは動物たちはあるがままだ。そんな息つまる展開にギュッとかたまった

ネズミの命は小さな虫となって

大人たちを、子どもたちの柔らかな体からのエネルギーが、包んでくれて、ホッと息がつけた。

そもそもなんで「ブンナよ、木からおりてこい」という題なのかしら？　「カエルの子ブンナの大冒険」的なものでも良いのに……。地上をはいずりまわって生きているカエルの目線、地べたから呼びかけている「早く降りてきなさい、木の上は危険だよ、木の上からは遠くは見えるけれど、地上で身分相応に生きていけばいいんだよ、危ないから早く降りてきなさい」と呼んでいる。しかしブンナは、地上では決して知りえなかった生と死の体験をして地上に降りてくる。その後、人間の子どもにつかまってしまうが、前のブンナとはちょっと違う。「自分の中にはネズミの命が生きている。何が何でも脱出して生きるんだ！」何も知らないで生きていた時より、知ってしまったブンナはたくましくなっていた。投げ込まれたごはんを食べ、エネルギーが全身に満ちるまであせらず待ち、渾身の力を振りしぼり、友だちと一緒に逃げられた。外に出たブンナに世界は美しく輝き、ただうれしくてたまらない。生きる喜びを体いっぱいに表して力いっぱいに歌い踊る。そのエネルギーにすべて包み込まれ、思わず込み上げるものを感じた舞台だった。

（京浜協同劇団団員・休団中）

カーテンコール

第２回　旬をたのしむ夕べ

交流が盛り上がり

小野寺　晃

6 月 19 日（日）に文化の仲間主催でおよそ 40 数名の参加で「旬をたのしむ夕べ」がスペース京浜で行われました。

当初は、屋上で行う予定でしたが、雨が降り出し、すでに運び上げたものを屋上から 1 階に降ろす作業など、場所の変更で役員さんはてんやわんやになりました。定刻になり、細田寿郎さんの乾杯の音頭でにぎやかに会が始まりました。

旬のものがテーブルに色とりどりに並び、特に刺身（アジ・カツオ）、新玉ねぎのトマト煮スープのほか、野菜サラダ、アジの酢の物、ちらしずし、フランスパン、手作りトコロテンなど、また、飲み物は日本酒・ビール・焼酎・ウーロン茶・ジュースなど、盛りだくさん。ほかにも、つまみなどを持ち込んでくださった方もいました。

宴たけなわで自己紹介になり、7 月 23・24 日『ブンナよ、木からおりてこい』のキャスト・スタッフ（参加の 4 劇団・市民）の方からの紹介、若い人たちの声など、宴席が盛り上がり、皆さん満足したと思います。

中締めのあとも残る人が大勢いて、交流が盛り上がっていました。　（文化の仲間世話人）

和気あいあいとした交流

西海亭マスターと細田さんが腕をふるいました

堤次郎よ、安らかに！

藤井　康雄

彼の訃報が妹さんから届いた 6 月の末、しばし呆然となった。実は 5 月の連休明けに彼を見舞って弘前に出向いていたからである。

6 年前に脳梗塞で倒れ、川崎から故郷の施設に入り、一時は自力歩行まで回復し、「戯曲を一本必ず書く」と言っていたのだ。しかしその後は骨折や腰痛での入退院を繰り返し、その挙句の脳梗塞の再発、手痛い打撃になったに相違ない。

咀嚼（そしゃく）が困難となり、誤嚥（ごえん）もたびたびに及び、ついに胃瘻（いろう）の施術に及んだと妹さんから伺ったのは昨年の秋。さらに彼は「川崎から友人が来る」としきりに言っていたという。そんなこともあって暇を見つけて出かけたのであった。

堤次郎こと本名鈴木晃との出会いは 15 歳の春、日本鋼管鶴鉄の養成工の寮の一室であり、青森、岩手出身者各 2 名の中に私たちはいた。それ以来まさに寝食を共にしてきたのである。労働運動、青年運動に飛び込んだのも、京浜で演劇を始めたのも結婚したのもほぼ同時期であり、その都度、折に触れては一杯やりながら喧々諤々やってきたのである。第二次稽古場建設時に専従としての役割を担うために退社した彼に倣ったわけではないが、私も持病を抱え劇団との二足の草鞋は厳しく退社している。

彼との思い出は尽きないが、不幸としか言いようのない事柄が多い。惚れぬいて結婚したのだがついに別れたとか、初めての彼の「主役」の芝居、鉄道員（ぽっぽや）。稽古終盤に病に倒れ、他に譲らざるをえなかったとか、劇団専従になったとはいえ、その経済的保証はなきに等しく、働くことになったがその仕事がきつかったとか……。

そんな彼だが、一つだけ言い続けていたことがある。冒頭にも書いた「俺は戯曲を必ず書く」である。彼の訃報を聞いて呆然となったが暫くしてこう思うようになった。彼は京浜で過ごしたこと、京浜で仕事をしてきたことを誇りに思っているに違いない。そしてただ一つ心残りは「戯曲を書き上げなかった」ことであるに違いないと。そうだとしても暫くはゆっくりと休んでくれ。安らかに眠ってくれ。へそ曲がりの君は納得しないのかもしれない。よし！俺もいずれはそちらに行く。それまでいいのだからもし戯曲ができていたらあの世で上演しようじゃないか。合掌。

会報編集部から　文化の仲間会員で、元京浜協同劇団員の堤次郎（本名鈴木晃）さんは、療養中のところ、6 月 28 日に郷里の弘前で亡くなられました。73 歳でした。

どこにお住まいでも、いつからでも、入会歓迎！

川崎さいわい市民劇場　菊谷　友美

こんにちは。文化の仲間・会員の菊谷（きくたに）です。職業は、川崎さいわい市民劇場の事務局長です。2007 年に川崎市民劇場の事務局員になり、産休から復帰した 2010 年より幸会場の担当に。「この地域で文化運動をするなら京浜協同劇団と密接な関係を持つべき！」と直感し、その昔憲法劇でお世話になったご縁も感じながら、仲間の会に入りました。その後、2013 年に「川崎さいわい市民劇場」「川崎市民劇場なかはら」という 2 つの組織に、互いの自立と発展を目指して分離独立。私は、さいわいの事務局長になりました。

今更（？）ですが、演劇鑑賞会は毎月の会費を持ち寄る会員の自主的な会です。様々な劇団を地域の会場に迎え、定期的に鑑賞する会員がいて成立しています。会員はお客様ではなく主催者！　3 人以上でサークルを作り、全てのことを話し合って進めます。ある全リ演加盟の劇団製作者の「あらゆる民主団体の中で最も民主主義を徹底しているのが演劇鑑賞会」という言葉が、私は密かな自慢です。

演劇鑑賞運動は、戦前の築地小劇場の流れから脈々と続く、時代の荒波と闘い続けてきた新劇運動の中から生まれました。66 年に「この京浜地域にも若者の健全な文化を！」というエネルギーが結集し、前身である京浜労演は誕生したと聞いています。そこには当然、京浜協同劇団の力もあったでしょう。どんなドラマよりドラマチックな様子が想像できます。

今年は京浜労演設立から 50 年。その頃はまだ生まれていなかった私も、演劇を通じて人間が大切にされる平和な社会を目指す運動を、この地域で、京浜協同劇団の皆さんとも協力しあって推し進めたい、だからこそ市民劇場の会員でスペース京浜に足を運んだことのない人をゼロにしたいし、京浜協同劇団や文化の仲間の皆さんは全員が市民劇場の会員であって欲しいと思っています。

現代は厳しい時代です。労働の現場でも教育の現場でも、50 年前のパワーを持った人はなかなか育たず、若者は分断されています。全国の演劇鑑賞会は 140 団体、会員数は約 15 万人と、最盛期の約半分です。どの会も、どうしたら会員を増やせるか考え、日々実践し、学びあっています。そこで明らかになったことは、会員を増やす「方法」ではなく、何のために会員を増やすのかという「目的」つまり「理念」を明確にし、そこに向かう意思なしに発展はありえないという、とても根本的なことでした。

川崎さいわい市民劇場でも、会員数は 7 月末時点で 560 人と非常に厳しい状況です。この 8 月末は前進座の歌舞伎『切られお富』を、10 月は俳優座の『気骨の判決』という、東条英機と命がけで闘った裁判官・吉田久の物語を例会に迎えます。この、反戦・平和の思いを持ち、商業主義とは一線を画した活動を続ける新劇団と共に発展したい、そのためには毎例会 1 人でも多くの会員を増やしていきたいと思っています。「どこにお住まいでも、いつからでも、入会歓迎！」

「川崎文化会議」と私たち「文化の仲間」について

文化の仲間事務局　山木　健介

私たち文化の仲間は、川崎文化会議に加盟しています。川崎文化会議は結成 50 年を迎え、今年「50 周年記念誌」を刊行しました。

川崎文化会議は、市民の立場に立つ文化活動をする団体と個人が加盟し、川崎の文化の発展をめざす団体です。川崎市民劇場内に事務局を置いて、現在の議長は京浜協同劇団の城谷護さんです。50 周年記念誌（500 円）をご希望の方は、劇団の城谷さんまでご連絡ください。

文化の仲間との関係では、1996 年 9 月 1 日に文化の仲間が発足しましたが、京浜協同劇団の勧めで 2 年後の 1998 年 5 月 24 日の川崎文化会議の総会に参加したのがお付き合いの始まりです。

現在は、文化の仲間の世話人の中から川崎文化会議担当を決めて、月 1 回の幹事会に参加しています。

「戦後 70 年を機に、自分史を振り返る」・その 5

――夜行列車に乗って、芝居の道へ（1953 年）――

小田　健也

○「劇団民芸」の入団試験。

私より先に劇団に入っていた友人から「劇団民芸が新人を募集しているぜ」という連絡をもらった。親ももう諦めたであろうか、すぐに許してくれた。そこで劇団「民芸」の新人募集に応募して、青山一丁目に行き、願書を出した。

応募者総数は百人余、第一次は書類審査、第二次は朗読、歌、リズム体操といった実技試験、第三次は面接試験、ただもう無我夢中であったが、第三次試験の口頭試問で、「最近の社会的な事件で、あなたの最も関心を引いた事件は何ですか」という質問。そこで私は「東京の方には実感がないでしょうが、朝鮮動乱が休戦になったことです」と云うと、数人の俳優さんの表情が変わった。そこで私は、大学時の上をすれすれにジェット機が飛ぶこと、その爆音で授業が出来ないこと、「しかし休戦になってやっと教授の講義が聞けるようになりました。これが平和の実感です」劇団の人たちは暫し試験官を忘れて、聴き入ってくれた。――合格は男 7 人、女 7 人だった。

しかしこうして入った劇団だったが、当時の民芸には俳優養成のシステムは何もなく、14 人は行っても行かなくてもいいような毎日だった。そこで仕方なく、自分たちで集まっては、なんとか勉強しようと、劇団の先輩に頼んで指導して貰うのが、まあ、授業と云えば授業みたいなものだった。――しかし今思うと、俳優術というものは教わるものでなくて、先輩俳優の芝居を見て〈盗む〉ものだ、ということだったのかな？？？

○演出家・岡倉士朗さんとの出逢い。

しかしそんな中で、私にとって大きな出逢いになったのは、演出家の岡倉士朗先生の講義を受けたことである。とても真摯な先生で、例えばスタニスラフスキーの演劇論を先生自身がお読みになって、疑問に思われたことを、入ったばかりの私たちを捉まえて「小田君、この文章のここの部分を、どう思うかね」と質問をぶつけられるのだ。私がありったけの知識を掻き集めてお答えすると、「うん、面白い。お茶飲みに行こうか」と青山一丁目の喫茶店に行き、演劇論議をお続けになるのである。今考えれば勿体ないような時間であったが、私のような研究生を捉まえて演劇の論議をなさる先生は、本当に真摯な方であったと、後になってつくづく感じたことである。

そんなことがあってか、私が民芸をやめた後でも、親しく教えを受け、先生が昭和 34 年に亡くなられた後、先生が演出されていたオペラ「夕鶴」を私が受け継ぐことになったのも、貴重なご縁であったと云うべきであろう。

○〈博多なまり〉に悩む。

幸運なことに入団した翌年の昭和 29 年、その岡倉先生の演出で初舞台を踏むことになるのである。しかし、ああ、情けないことに、東京へ来て 1 年足らずの新入り役者は、〈博多なまり〉に苦労することになるのである。

その舞台は**福田恒存作「幽霊やしき」**、典型的な都会の中流家庭。私の役はその家の 17 歳の長男の役。父親役は清水将夫さん、母親役は高野由美さん（この両親は本当のご夫婦）。その母親が居眠りをしている夫に「貴方また居眠りしていらっしゃるのね」と云うと、すかさず僕が口をはさむ。「お父さんはね、**疲れた**から**寝る**んじゃなくて、**疲れ**ない**前に**、**寝て**おくんですよ」。

……ああ、今思い出しても忸怩たる想いだ。なんと、この台詞に**なまり**が五つもあるのだ（ゴチックの箇所がなまり）。その夜徹夜で、東京生まれの友人に飯にコーヒー付きで直して貰った。正直、東京育ちが憎らしかった。

○“なまり直し”が役に立つこともある。

しかしなまりには苦労したが、得をすることもある。**なまり**を直すために、否応なく何度も何度も台本を読むことになる。

稽古に〈立ち稽古〉〈読み稽古〉があるが、当然のことながら**なまり**を直そうとすると、何度も台本を読む結果になる。これがいいのだ。

演出家になってからも、役者の〈台詞の読み〉が気になるのだが、役者がその作品の内容を、〈ドラマ〉としてどのくらい理解して自分のものにするかは、読み稽古に依るところが大きい。したがって、**なまりを直すために**、「戯曲」を一行一句、つぶさに読み取っていくことは、とても役立つことであり、なまり直しの〈怪我の功名〉というべきかも知れない。

しかし「読み稽古」といっても、稽古場で声を出して読むだけではダメ。黙読することが大事だと、名優・滝沢修さんからよく言われたものである。

幽霊やしきの舞台（写真：小田さん提供、左が筆者）

今年の秋は 2 本立てです

京浜協同劇団・制作　城谷　護

今年の秋の公演は 2 本立てに決まりました。

権力に機知で立ち向かう民衆を描いた、川村光夫作『めくらぶんど』。そして、貧困の悲劇を描いて社会の矛盾を突く、山本有三作『嬰児殺し』。今までの劇団の芝居とは一味も二味も違う必見の舞台になりそうです。総合演出には藤井康雄が当たります。ご期待ください。

川村光夫作『めくらぶんど』

兵隊にとられた一人息子は南の島で戦死。悲しみをぬぐい切れないで 29 年を過ごしてきた老夫婦。雪の降りしきるある夜、爺さまのもとに去年亡くなった婆さまが現れる。婆さまは、「天皇陛下のために」死んだ息子のことが忘れられず、死にきれないのだ。

積雪をそのままにしておくと屋根が落ちてしまう。爺さまは村人に助けを求めて大声をかけるが、来たのは村人ではなく密造酒を取り締まる税務署の役人だった。ぶどう酒の甕を見つけ摘発しようとする役人に、姿の見えない婆さまの咄嗟の知恵入れで爺さまは酒を勧める。が、その酒は「めくらぶんど」というぶどう酒で、それを飲むと目が見えなくなると聞いた役人はほうほうのていで逃げ帰ってしまう……。

作者の川村光夫さんは、岩手県湯田村（現西和賀町）在住の劇作家で、94 歳。66 年も前に同村にぶどう座という全国的にも有名な地域劇団を結成、銀河ホールの建設にも貢献した人。

京浜協同劇団は、同氏の作品『がんとり』、『うたよみざる』を上演しています。

山本有三作『嬰児殺し』

もう 1 本は、近代戯曲の名作といわれる山本有三の『嬰児殺し』です。1920 年（大正 9 年）に発表され反響を呼んだ作品です。題名はきついのですが、登場人物の心情が染みわたってくるいい芝居です。自らが生んだ赤子を貧しさゆえ、殺めざるを得なかった女土方の苦悩、また、それに同情しながらも彼女を連行せざるを得なかった巡査の葛藤が見事に描かれています。芝居の醍醐味が味わえる作品です。

ご存知、山本有三は 1887 年（明治 20 年）に栃木県で生まれ、大正から昭和にかけて活躍した小説家、劇作家、政治家です。社会劇、歴史劇を経て、大正末に小説に転じ、1937 年に『朝日新聞』に連載された「路傍の石」は有名です。軍隊や国の交戦権を否定した憲法を擁護する立場で、「裸より強いものはない」という名言を残しています。

京浜協同劇団　第 90 回公演　予告

川村光夫作

めくらぶんど

山本有三作

嬰児殺し

日　程　2016 年 12 月 2 日（金）～ 11 日（日）（開演時刻は右の表を参照）

会　場　スペース京浜

入場料　詳細が決まりしだい、チラシなどでお知らせします。

問合せ・申込先　京浜協同劇団

〒 212-0052　川崎市幸区古市場 2-109

TEL 044-511-4951 FAX 044-533-6694

メール　keihinkyoudougekidan@nifty.com

12 月	2(金)	3(土)	4(日)	9(金)	10(土)	11(日)
午前 11 時		○	○		○	○
午後 3 時		○	○		○	○
午後 7 時	○			○		

◎文化の仲間通信◎

◆ NHK ラジオ深夜便「明日へのことば」
腹話術師しろたにまもる出演

日時　8 月 29 日午前 4 時 5 分～ 4 時 45 分
劇団の城谷さんが出演します。2 度目の出演です。

◆朗読劇「平和をこの手に」

日程　9 月 3 日（土）午後 1 時 30 分開演
会場　川崎市幸市民館日吉分館
入場料　無料（定員 50 名・先着順）
作　城谷護／演出　瀬谷やほこ／出演　戦争体験を朗読劇にする幸区市民の会
問合せ　城谷　044-544-3737

◆震災から 5 年　それぞれの視点から伝えたいこと
原発、健康とくらし

日程　9 月 3 日（土）12:40 ～ 16:30
会場　川崎市産業振興会館
入場料　無料
〇ドラマリーディング　空の村号　12:40 ～ 13:45
作 篠原久美子／演出 和田庸子／出演 京浜協同劇団
〇原子力災害による健康への影響と長期的課題
～チェルノブイリ原発事故医療支援の経験を通して～
14:00 ～ 15:30
医師　菅谷昭（長野県松本市長）
〇おしどりコマ・ケンの軽快トーク
東京電力福島第一原発の現状　15:30 ～ 16:30
主催　生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ
問合せ　企画広報課　045-470-1154

◆奥山眞佐子ひとり芝居《樋口一葉没後 120 年記念》

会場　三越劇場
日程と演目
9 月 2 日（金）午後 7 時開演　「にごりえ」
9 月 3 日（土）午後 3 時開演　「一葉の母 そして十三夜」
9 月 4 日（日）午後 3 時開演　「一葉日記 そして 大つごもり」
入場料　1 作品 6,000 円（22 歳以下 3,500 円）／ 3 作通し券 15,000 円（22 歳以下 9,000 円）
構成・演出　鈴木龍男
樋口一葉没後 120 年、明治時代の美しい日本語で描かれた女性たちの生き様。
問合せ　三越劇場 0120-03-9354
http://mitsukoshi.mistore.jp/bunka/theater/

◆第 9 回　弾談の会ぴあ～の公演
時のにおい　からだの記憶～明日へ～

日程　9 月 15 日（木）19:00 開演（18:30 開場）
会場　武蔵野スイングホール
料金　会員 2,800 円　一般 3,300 円（当日 3,500 円）
主催　弾談の会ぴあ～の
ゲスト　三戸眞澄（民族歌舞団・こぶし座元座員）
ピアノ　鈴木たか子
プログラム
ピアノ演奏　ピアノソナタ「1905 年 10 月 1 日街頭にて」ヤナーチェク・ピアノソナタ 17 番 op.31 の 2「テンペスト」ベートーベン
三戸眞澄さんを迎えて　踊り：かっぽれ・都々逸：おばさん目線で世相をのぞく　ほか
問合せ　市原賎香 070-5454-3570

◆青年劇場　第 115 回公演　郡上の立百姓

日程･会場
9 月 17 日（土）～ 25 日（日）時間詳細問合せ
紀伊国屋ホール
9 月 27 日（火）18:30 開演
神奈川県立青少年センター
9 月 28 日（水）18:30 開演
府中の森芸術劇場ふるさとホール
入場料　一般 5,150 円　30 歳以下 3,100 円
作　こばやしひろし／演出　藤井ごう／出演　葛西和男・中谷源・広戸聡・吉村直・杉本光弘　ほか
宝暦 4 年、美濃国郡上郡百三十か村の百姓たちが立ち上がった。年貢徴収法が改定され、より重い増税となってのしかかってきたのだ。百姓たちの激しい抵抗に、郡上藩はいったん願いを聞き入れるが……。
問合せ　青年劇場チケットサービス　03-3352-7200
http://www.seinengekijo.co.jp

◆まぁ～どれ・さいわい　第 8 回コンサート
―私たちはあきらめない―あなたに伝えたい 平和への願い

日程　10 月 19 日（水）18:30 開演（18:00 開場）
会場　ミューザ川崎 市民交流室（JR 川崎駅徒歩 1 分）
参加協力券　800 円
主な演目　第 1 部　地元の歌手 坂本九の曲より　上を向いて歩こう･明日があるさ･見上げてごらん夜の星を／第 2 部　みんなが親しんだなつかしい歌　夢見る人･埴生の宿･ともしび／第 3 部　平和を願う歌　いとし子よ･美らうた･その夏を教えて　ほか
指揮　山寺圭子／ピアノ　山内千晶
問合せ　新日本婦人の会幸支部　044-511-3128

■文化の仲間ギャラリー■　　小野寺 晃⑳